

「丁寧」の意味変化：
コミュニケーション行動評価概念の異文化間比較の
ために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西嶋, 義憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6266

「丁寧」の意味変化*

—コミュニケーション行動評価概念の異文化間比較のために—

西 嶋 義 憲

目 次

- 0. はじめに
 - 1. ポライトネスと「丁寧」
 - 1.1. コミュニケーション行動評価概念
 - 1.2. 「丁寧」の語源
 - 2. 約100年前の「丁寧」の意味
 - 3. 現代の「丁寧」の意味
 - 4. 「丁寧」と「礼儀正しい」
 - 4.1. 「丁寧」の意味変化と日本の社会変化
 - 4.2. 近代国家成立後の日本の社会変化
 - 5. 結語
- 注
文献

0. はじめに

日本語では一般に「丁寧さ」という用語で言及される、コミュニケーションにおける配慮行動に関する研究は、従来、その普遍的側面が強調されることが多かった (Brown/Levinson, 1987)。たしかに、コミュニケーションにおける配慮行動は、どの言語社会にあっても認められる。その意味で、普遍的と言っていい。しかしながら、具体的な配慮行動を観察すると、言語文化ごとに類似点だけでなく、相違点もあることに気づく (Eelen, 2001)。むしろ、実際のコミュニケーションにおいては類似点よりも違いのほうが重要である。違いを無視するとコミュニケーション参与者間の関係維持に悪影響を及ぼす可能性があるからである。

コミュニケーション行動における配慮行動の個別文化的規定性は、研究の初期段階ですでに Reinelt et al. (1987) が、ある場面におけるドイツ語の適切な相互行為と日本語のそれとの比較を通じて指摘している。上記のような配慮行動は、英語およびドイツ語ではそれぞれ「politeness」と「Höflichkeit」という概念で包括される。Watts (1992) は、英語圏の「politeness」概念の歴史的な変遷の経緯を論じ、その個別文化的性格を指摘している。Ehlich (1991) および Reinelt (1995) は、ドイツ語の「Höflichkeit」の歴史とコミュニケーション形態の歴史的变化を論じている。それは、制度としての「Hof」(宮廷)とそこでの慣習にかかわり、個別言語文化的な要因に依存していることを強調している。Marui et al. (1996) は、この分野での比較的新しい研究であり、コミュニケーションにおける配慮行動に関するさまざまな側面をテーマ化している。

Nishijima (2000) はドイツ語の「Höflichkeit」と「Freundlichkeit」の使用範囲について調査し、ドイツ人のコミュニケーション行動において「Höflichkeit」は必ずしも代表的な概念ではないことを指摘している。同様に、Yamashita (2002) はドイツ人がコミュニケーションの際考慮する概念を調査し、重要なのは「höflich」ではなく、「freundlich」や「ehrlich」であることを明らかにした。Kuhlmann (2005) は、日本語とドイツ語の基本的なコミュニケーション行動評価概念を比較し、その違いを論じている。また、Nishijima (2006) は、コミュニケーション行動評価概念の獲得には社会化 (socialization) の過程で使用される、しつけ言葉などの慣用表現がかかわっているという仮説に基づき、日独両言語の慣用表現を比較している。

本稿は、本来、上記共同研究 Marui et al. (1996) の枠組で実施された調査に基づいている。本研究は、「丁寧」という語の意味の歴史的变化を扱っている。この「丁寧」という語は、すでにふれたように、英語の「politeness」やドイツ語の「Höflichkeit」に対応し、個別言語的に言語的・非言語的振る舞いをメタコミュニケーション的に表示する機能をもつ。本研究では、過去100年間におけるこの語の歴史的な意味変化を、1900年前後に発行された実用国語辞典の辞書記述と2000年前後のそれとを詳細に比較することによって明らかにする。意味変化の説明のために、近代日本が成立した際の社会構造

変化を引き合いに出す。それに基づいて、日本における社会変化が「丁寧」の語義変化に影響を与えたと論じる。このようにして、「丁寧さ」に関わる現象は、個々の社会によって歴史的に条件付けられ、そのため個別言語的な問題であると主張する。

1. ポライトネスと「丁寧」

1.1. コミュニケーション行動評価概念

「ポライトネス (politeness)」とは、コミュニケーション行動における配慮行動のことである (Ide, 1988)。この概念のもとに研究されてきた現象は、主につぎの三つの側面からなる (Marui et al., 1996) :

第一レベル：言語および非言語手段

第二レベル：ストラテジーとしての相互行為マネージメント

第三レベル：コミュニケーション行動を評価する日常的概念

第一レベルに属するのは、敬語表現などの言語手段やお辞儀などの非言語手段である。第二レベルは、第一レベルと第三レベルを結び付ける媒介管理部門と言える。ある状況において表出された第一レベルの表現を第三レベルの概念と照らし合わせ評価したり、あるいは、ある特定の概念を実現させるような表現を第一レベルにおいて選択する役割をになう。第三レベルは、特定の社会や文化で歴史的に成立した基本概念で、社会的相互行為をメタレベルから評価するものである。それにはたとえば、「丁寧」や「親切」、「生意気」「出しゃばり」などの日常的な概念が含まれる。これらの個々の概念は、従来のポライトネスに関する研究においてしばしば英語では「politeness」、ドイツ語では「Höflichkeit」、日本語では「丁寧」という上位概念で包括されてきた。問題は、たとえば「丁寧」が個別の評価概念の一つでありながら、そのような個々の概念を包括する理論的上位概念でもあるということだ。本稿では、この「丁寧」という概念に焦点をあてる。なぜなら、この語は個別の日常的评价概念を表わしているだけでなく、評価概念全体の代表となる理

論的概念でもあり、日本社会で重要視されてきたと言えるからである。

1. 2. 「丁寧」の語源

『日本国語大辞典』によると、「丁寧」とは、「昔、中国の軍中で、警戒の知らせや注意のために用いられた楽器」と説明されている（p. 574）。そこから、「注意深さ」ないし「念入り」といった意味が引き出されたわけである。今日では、この語は、さらに社会的な相互行為を評価するために使用されるようになってきている。そのため、「丁寧」はたとえば、つぎの二つの発話で使用できるわけだ：

- a) そのプレゼントはずいぶん丁寧に包んだね。
- b) ご丁寧にもお返事をくださり、どうもありがとう。

a) の「丁寧」の意味は、包み方という作業への注意深さと念入りと規定できる。b) は、返答が相互行為として礼儀にかなっているとの評価と理解できる。以下では、もっぱら後者の意味の獲得に焦点をあてる。

2. 約100年前の「丁寧」の意味

上で見たように、「丁寧」は今日では、基本的に二つの異なる意味をもつ。しかし、かつてこの語は、「注意深さ」ないし「念入り」と関係していた。どのようにしてこの語は、相互行為の行為様式を評価する新しい意味を獲得したのだろうか。これを明らかにするために、今から約100年前に公刊された、3冊の実用国語辞典の辞書記述を調査してみた：

「丁寧」

- 1) 『日本辞書 言海』(大槻, 1891)
善ク善ク心ヲツケテ, ネンゴロニ, 心切ニ (p. 685)
- 2) 『帝国大辞典』(三省堂, 1896)
ねんごろ, 深切, 鄭重 などいふにおなじ (p. 1414)

3) 『日本大辞典 ことばの泉』(大倉書店, 1901)

ねんごろなること。てあつきこと。志んせつ。鄭重, 慇懃 (p. 916)

この3冊の辞書は、共通して、「丁寧」を「ねんごろ」と「しんせつ(心切, 深切, 志んせつ)」という二つの語によって説明している。2冊に共通する説明語は、「鄭重」である。

「ていねい」と他の説明語句との関係を明らかにするために、「ていねい」の説明に使用される語を同じ辞書で調べてみることにしよう¹⁾：

1') 『日本辞書 言海』(1891)

「ねんごろに」(「ねもごろに」から派生)：

真心ヲモテ。手厚ク。心切ニ。

「ねもごろに」：

深切ニ。慇懃ニ。丁寧ニ。ネンゴロニ。

「深切に」：

志ノ深くシテ切ナルコト。心實ニ事ヲナスコト。懇ニモノスルコト。

2') 『帝国大辞典』(1896)

「ねんごろ」：

親切, 又は慇懃に, などいふに同じ。

「親切」：

ねんごろ, まめやか, 心の深きこと, などいふにおなじ。

「鄭重」：

丁寧, ねんごろ, などいふにおなじ。

3') 『ことばの泉』(1901)

「ねんごろ, ねもごろに」：

深切に, ていねいに, 慇懃に。

「てあつい」：

鄭重なり, ねんごろなり。

「志んせつ」：

懇にいたわること。まめやか。しんせつ。

3. 現代の「丁寧」の意味

時間の流れとともに、社会システムも変化する。ある社会のシステムが変化すれば、コミュニケーション行動評価概念の役割もその新しい社会の中で変更を余儀なくされる。その場合、この評価概念を表示する語彙の意味も同様に変化することになる。この変化を検証するために、本節では、「ていねい」の語義を現代の実用国語辞典を参照することによって調べてみよう。

「ていねい」(下線による強調は筆者)

4) 『日本国語大辞典』(小学館, 2001-2002)

手厚く親切なこと。ねんごろで礼儀正しいこと。また、そのさま。懇切。(p. 574)

5) 『日本語大辞典』(講談社, 1989)

きちんとしていて礼儀正しいさま。politeness。(p. 1322)

6) 『広辞苑』(岩波書店, 1998)

注意深く心が行き届くこと、てあつく礼儀正しいこと。(p. 1818)

三冊の国語辞典を調べてみて目に付くことは、「ていねい」の定義すべてに、「礼儀正しい」(下線で強調してある)という説明が含まれているということだ。対人行動レベルでの「丁寧」の共通する定義は、したがって、つぎのようになろう：

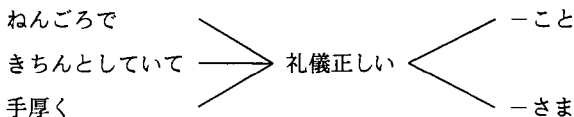


図2 20世紀末前後の「ていねい」の相互行為関連の意味構造

このように、現代の「ていねい」の共通する基本的な意味は「礼儀正しい」と規定することができる。すなわち、ある社会で期待される行動の形式と関連づけられていることがわかる。「礼儀正しい」という言い換え表現は、「礼儀」と「正しい」の複合表現である。その意味は、「礼儀にしたがった」と言い換えることができる。「礼儀」は、本来、儒教の規範とその行動原理の一つを表わすものだった。その限りで、「ていねい」の基本的意味は、相互行為関連では、「礼儀正しい」と定義でき、したがって、「儒教規範とその行動原則にのっとって」といった意味になる。しかしながら、これは、今日において妥当するとはいえない。なぜなら、今日では通常、「礼儀」の日常的な使用において「礼儀」にはどのようなものが属しているのかは、もはやわからないからである。むしろ、「礼儀正しい」は何らかの規範的な行動形式にしたがったという意味において理解可能である、と言ったほうがより正確かもしれない。

4. 「丁寧」と「礼儀正しい」

4.1. 「丁寧」の意味変化と日本の社会変化

「丁寧」の語義説明を、現代の実用国語辞典と約100年前のそれとで比較すると、その100年間で語義に顕著な変化があったことがわかる。興味深いのは、「丁寧」の語義説明に現代の国語辞典では共通して出現する「礼儀正しい」が、古い辞書の定義の中にはそれに相当する語句が見当たらないことである。このような辞書記述に基づくと、「丁寧」という語は、約100年前には「礼儀正しい」と直接関係していなかったことがわかる。「丁寧」関連の語彙グループと「礼儀正しい」関連の語彙グループは、約100年前には、まったく別の次元のものと認識され、別々に記述されていたのであろう。属する語場が異なっていたと言ってもいい。事実、100年前の辞書には、「礼儀正しい」という複合表現は見出し語としても他の語句の説明表現としても記載されていない。ここから類推するに、「礼儀」は当時、「儒教の規範と行動原則」しか意味していなかったのだろう。したがって、「丁寧」の新旧の意味は、異なる社会的次元にあるといえる。

「丁寧」の今日の意味は、「規範的な形式性」に基づいているが、100年前の「丁寧」はその基本的意味として、「ねんごろ」と「丁重」が含まれていた。つまり、これは個人的な態度や性向としての評価である。ここで推論できるのは、「丁寧」の古い意味における個人的要素が、時間の経過とともに何らかのかたちで、規範的な形式性によって置き換えられたということだ⁴⁾。しかし、それはいつのことで、どのようにして生じたのであろうか。この点は、Marui et al. (1996) では十分に扱うことができなかった問題である。そこで、本稿ではその点を今少し詳しく分析したい。

4. 2. 近代国家成立後の日本の社会変化

語義変化の理由を説明するためには、日本の近代化の歴史を考慮する必要がある。なぜなら、価値概念の意味変化は、通常、ある社会の社会システムの重要な部分、たとえば人間関係を規定する社会的構造などの変化に関係しているからである。

19世紀後半において中央集権国家としての近代日本が成立したのに伴い、人と人との関係の形式が顕著に変化した。この変化は、一般に、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行もしくは、共同体内の自立性から相互依存関係への変化と特徴づけることができよう。この依存関係は、平等意識の広まりに基づくものである⁵⁾。

19世紀までの日本は、封建社会であったため閉鎖された社会であり、移動の自由は制限されていた。そのため、自分の関わる社会以外の他者と個人間の関係を新たに自由につくる機会はほとんどなかった。ところが、明治維新後の近代化の結果、移動が日常化し、自分が住む社会において異なる社会的背景を持つ他者と出会い、かかわりあいになる機会がふえた。その際、個人間の関係を規定する要因にも変化が生じた。これが、必然的に、相互行為の行動様式に変化を引き起こしたのであろう。そして、個人間の行動様式の変化が、コミュニケーション行動評価概念の役割に対して何らかの影響を及ぼしたと推測される。それにしたがって、コミュニケーション行動評価概念を表示する語彙(たとえば、「ていねい」)の意味が変化したと考えられる。

*

上記の説明に基づくと、「ていねい」の語義変化はつきのように説明できる。明治以来、移動の自由が可能な動的な社会の実現によって必要になった、新しい人間関係の形成は、その新しい社会に適合する新たな行動形式と規範を要求することになった。日本におけるこの行動形式を説明するために、「礼儀」の意味の変化を考慮する必要がある。

儒教に由来する「礼儀」は、かつて、武家社会の厳格な規範として重要な役割をになっていた。ところが、武家社会の没落にともない、「礼儀」の重要性が失われただけでなく、「礼儀」の前提となる社会自体が存在なくなり、その関連がなくなった。これによって、「礼儀」の意味の空虚化が生じた⁶⁾。そのような規範のあいまい化した日本において統一を成し遂げるために、まず標準語としての国語が策定され、公教育によって国語が教授された。その際、敬語だけでなく、規範にしたがった言語的・非言語的行動様式もあわせて教えられた⁷⁾。こういった振る舞い方は、「礼儀」ないし「礼儀正しい」とみなされるようになった。標準語の広まりとそれと同時に伝授された規範的な行動様式のおかげで、相互行為の際の個人的な要素（たとえば、「ねんごろ」）は規範的付き合い形式（すなわち、「礼儀正しい」）に置き換えられることになった。今日では、「礼儀正しい」は「ていねい」の語義の一要素と見なされる。他方、仕事などにおける注意深さや念入りを意味する要素は現代でもまだ残されている。

このような社会変化と「ていねい」の語義変化は、近代化前後で図式化して表わすと次の表1のようになる。

近代化前		近代化後	
身分社会内の共同体		平等社会の相互依存性	
相互行為の側面			
閉じられた 固定した／静的な 知られた／慣れた 親密な		開いた 移動自由な／動的な 匿名の／見知らぬ 表面的な	
言語的側面			
「礼儀」	「ていねい」	「礼儀 (正しい)」	「ていねい」
理想的行動としての 儒教的規範	ねんごろ	何らかの行動形式 (意味の空虚化)	(ねんごろ) ⁸⁾ 礼儀正しい
	念入り		念入り
規範的	個人的	形式的	

表1 「ていねい」の意味の変遷

5. 結語

「ていねい」の語義変化を日本社会の歴史的变化(近代化)とそれにとまなう相互行為様式の変化に関連付けて説明を試みた。この作業を通じて、いわゆる「丁寧さ」に関わる現象は個々の社会によって歴史的に条件づけられていることが示されたはずである。しかしながら、本稿の主張の妥当性は、コミュニケーション行動評価概念を表わす他の語彙を分析し同様の結果が得られて初めて確認できる。そのためには、本稿と同じ時間的な枠内で同様の方法を用いて他の語彙の調査をしていく必要がある。

注

* 本稿は、拙論(“Über den Bedeutungswandel des Wortes “teinei” – Zur internationalen Vergleich der Konzepte kommunikativen Tugenden –”. In: 『好村富士彦教授退官記念論文集』, 1995, 207-220.) の改訂日本語版である。今回の改訂にあたり現代の辞書類は、基本的に、最新版に依拠するようにした。

1) 「に」は、名詞から副詞を派生させる接尾辞であり、「こと」は、名詞化接尾辞である。本稿では、しかし、品詞の区別は考慮しないことにする。

2) 類語辞典『日本語類語大辞典』(1909年公刊。講談社リプリント版(1980)を利用)では、「ていねい」は『『ねんごろ』を看よ』と指示している(p. 997)。一方、「ねんごろ」を検索語として調べると、「大事にすること。手あつきこと、しんせつなること」と定義される(p. 1158)。「ねんごろに」という派生語は、「しんせつに、いんぎんに」と説明される(同所)。「しんせつ」と「いんぎん」は、「ていねい」と同様に「ねんごろ」を参照させている。このような語群では、「ねんごろ」がその中心に位置付けられていることが分かる。

『日葡辞書』には16・17世紀の日本語の語彙が集録されているが、それによると「ネンゴロ」は「親切、情愛、など」と説明されている。「ネンゴロナ」は「非常に手厚く扱ったり、かわいがったりする(人)、または、愛情のこもった親切な(こと)」(p. 458)と記されている。個人の態度にかかわる意味であることがわかる。

3) 二回以上説明語として出現した語だけを考慮することにする。なお、辞書の表記が統一されていないので、語句をひらがなで表わすことにする。

4) コミュニケーション行動評価概念のドイツ語や英語における同様の歴史的変化に関して、「Höflichkeit」については Ehlich (1991) および Reinetl (1995) を、「politeness」については Watts (1992) を、「freundlich」については Hermanns (1993) を参照。

5) 社会構造の変化に伴う個人間の協調関係の変化については、丸井(2006)がN. エリアスの社会理論を使って詳細に説明しているので、そちらを参照のこと。

6) Hermanns (1993) では、「freundlich」はその頻繁な使用によるインフレーションで意味の空虚化と形式化が生じたと説明している。

7) 標準語としての「国語」の成立については、真田(1987)および伊(1996)を、国語の拡大にともなう諸問題については田中(1989)を参照。

8) 「ねんごろ」の意味が、「礼儀正しい」に取って代わられたのである。しかし、その意味は、「事物に対するねんごろ」としての意味をたもっている。

参考文献

- Brown, P. / P. Levinson : *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Eelen, G. : *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome, 2001.

- Ehlich, K. : “Die Geschichtlichkeit der Höflichkeit”, Universität Dortmund: Ms., 1991.
- Hermanns, F. : “Mit freundlichen Grüßen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend”. In: W. P. Klein / I. Paul (Hrsg.): *Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart*. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter, 1993, 81-85.
- イ・ヨンスク : 『「国語」という思想. 近代日本の言語認識』岩波書店, 1996.
- Ide, S. : “Introduction”, In : *Multilingua*, 7(4), 1988, 371-374
- Kuhlmann, J. : “Sind Deutsche weniger kooperativ als Japaner?”. In : *Lebende Sprache*, Nr. 2, 2005, 68-76.
- 丸井一郎 : 『言語相互行為の理論のために 「当たり前」の分析』. 三元社, 2006.
- Marui, I. / Y. Nishijima / K. Noro / R. Reinelt / H. Yamashita : “Concepts of Communicative Virtues in Japanese and German”. In : M. Hellinger / U. Ammon (eds.) : *Contrastive Sociolinguistics*. (Contributions to the sociology of language), Berlin etc. : Mouton de Gruyter, 1996, 385-409.
- Nishijima, Y. : “Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhältnisse. -Ein lexikalischer Ansatz anhand der Beschreibung in Lexika”. In : 『金沢大学教養部論集』第33巻第2号, 1996, 155-178.
- Nishijima, Y. : “Freundlich und höflich: Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens”. In : 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第4号, 2000, 185-207.
- Nishijima, Y. : “For a Contrastive Study of Routine Formulas for Controlling Communicative Behaviors in German and Japanese: A Pilot Investigation”, Paper Presented at the 9th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences in Kanazawa, 2006.
- 西嶋義憲 : 「コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察 -対照社会言語学の観点から-」. In : 『金沢大学経済学部論集』第20巻第1号, 2000, 107-132.
- Reinelt, R. : “Wie die Höflichkeit ihr Gesicht verlor”. In : 『愛媛大学教養部紀要』第28号, 1995, 131-160.
- Reinelt, R. / I. Marui / R. Ohama : “Unobliging towards politeness”. Antwerpen: Paper Presented in IPrA, 1987.
- 真田真治 : 『標準語の成立事情』. PHP, 1987.
- 田中克彦 : 『国家語を越えて』. 筑摩書店, 1989.
- Watts, R. J. : “Linguistic politeness and politic verbal behavior : Reconsidering claims for universality”. In : R. J. Watts / S. Ide / K. Ehlich (eds.) : *Politeness in Language: Studies in its History, Theory, and Practice*. (Trends in Linguistics. Studies and Monographs 59), Berlin etc.: Mouton de Gruyter, 1992, 43-70.

- － Yamashita, H. : “Höflichkeit im Deutschen – am Beispiel der Verkaufsgespräche”.
In: 『ドイツ文学』第108号, 2002, 82-92.

辞書類

- － 『日本辞書 言海』大槻文彦編, 1891.
－ 『帝国大辞典』藤井乙男／草野清民編, 三省堂, 1896.
－ 『日本大辞典 ことばの泉』落合直文編, 全2巻, 大倉書店, 1901.
－ 『日本類語大辞典』芳賀矢一校閲 志田義秀・佐伯常麿編, 1909 (リプリント版:
『類語の辞典』全2巻, 講談社, 1980).
－ 『邦訳 日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳, 岩波書店, 1980.
－ 『日本国語大辞典』日本大辞典刊行会編, 全20巻, 小学館, 2001-2002.
－ 『日本語大事典』梅棹忠夫／金田一春彦／坂倉篤義／日野原重明編, 講談社, 1989.
－ 『広辞苑』新村出編, 第5版, 岩波書店, 1998.